ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

　体育の授業が終わり、汗まみれになった体操着から服にきがえたぼくたちは、やたら横はばが広いろうかを歩いていた。きている服は白い色の半そで短パンだけど、友だちも同じものをきている。ここのせい服だ。ぼくはさっきの友だち、『２５番』にたずねる。

「『２５番』、あんなに思いっきりなぐらなくても良かったんじゃない？」

「バーカ。ちゃんと手かげんしたって。つうか『６８番』こそ、あんな大げさに木刀ふっ飛ばさなくても良かったんじゃねーの？　あの様子だと、あいつ、今日はえんぴつを持てそうもなかったぜ？」

　やれやれと笑う『２５番』だけど、ぼくとしては、ちょっと強めの力で木刀をふり上げただけだ。それに、ぼくは少なくとも相手にケガはさせていない。『２５番』がさっきたたかった相手は、数日はいむ室に入院しないといけないらしいということを、ぼくはついさっき知った。それに比べれば、まだマシだろう。

　ちなみに『２５番』と『６８番』というのは、ぼくたちが互いをよび合うための、ようするに名前の代わりだ。さすがにぼくのことを『２４９９６８番』とよぶのは大変なので、番号の下二けたをとって、『６８番』である。友だちの番号は『２５００００番』で、下二けたは『００』だが、全体を見るとキリがいい数字なので、ぼくや周りの子はみんな、上二けたをとって『２５番』とよんでいる。

　名前がないこととか、勉強がたいへんなこととか、ほかにも、つらいことはいっぱいある。だけど、ここで『２５番』に会えたことは、ぼくにとって、これいじょうないくらい、うれしいことだった。この子に会えたことだけでも、ぼくはここに入って――いや、あの人に入れてもらえて――良かったと思う。きっとそれは、『２５番』も同じだろう。

「げっ」

　軽口をたたきながら白いかべにかけられた時計を見ると、今は十二時十分前。ぼくの口から、思わずそんな音がもれた。ついさっき体育の授業が終わり、これからお昼ごはんだが、ぼくにはいつも、その前に行かなければいけないところがある。やくそくの時間は十二時で、ここからは急がないと間に合わない。ここは、はしからはしまで歩くと一時間はかかるくらい広いのだ。

「ごめん、『２５番』。ぼく、先生のところに行かないと！」

「はぁ？　いつもは全然よゆうだろうが……って、ホントだ！」

　笑いながら時計を見た『２５番』は、あわててそうさけぶ。たしかにいつもはよゆうだけど、今日は急に四時間目の授業が体育になったせいか、どうもいつも通りの時間の使い方をしちゃいけないみたいである。きがえの時間を考えれば当然か。

「それじゃあ、後で部屋で会おうね！」

「おう！」

　その声を後ろに感じながら、本当はいけないけれど、ぼくは大理石のゆかをけって、ろうかを走る。走って怒られるより、やくそくをやぶって怒られる方が、ぼくにとってはこわい。

　こううんにも、走っているところを先生に見つかることなく、ぼくはやくそくの場所につく。時間はギリギリだいじょうぶだけど、ぼくの心ぞうは、まるでだれかに叩かれているように、いたくてたまらなかった。古ぼけた木の戸には『カウンセリングルーム』と、ぼくの目よりかなり高いところに白い字で小さく書かれている。

　もうちょっとでやくそくの時間だけど、ぼくは戸の前で立ちすくんでいた。この部屋に入るのは、べつに今日がはじめてじゃない。むしろ、毎日来ている。それでも、ぼくはいまだに、この部屋に入ることをこばんでしまう。ここに来たら、何があるのか、何をするのか分かっているから。

　でも、いつまでも立ちすくんでいるわけにはいかない。深くいきをすってから、ぼくは戸をたたいた。中から「どうぞ」という声が聞こえる。女の人の声だ。

「先生、しつれいします」

　戸を開けて中に入ると、古ぼけた茶色いゆかと、まっ白なかべが目に入る。広い空間には、まどの近くにつくえがあり、その前にいすが二きゃくあるだけだ。遠くで、さっき返事をした女の人が、ぼくを手まねきする。パソコンを使っていたのか、青い光がかのの顔をてらしていた。この人は、ぼくの先生だ。でも、先生と言っても、勉強を教えてくれるわけじゃない。ぼくは大人をあまり見たことがないけど、先生は多分、本当のとしより、ふけて見えるにちがいないと思う。黒い中に、ところどころ白い線がここからでも見えるかみの毛や、口のあたりに見えるしわが、ぼくにそう思わせているのだろ。これでも今年で二十二さいだ。でも――

「『６８番』君、今日はいつもより遅かったね。どうかしたのかい？」

「あ、はい。今日は四時間目に体育があって……その後のきがえで、少しおそくなりました。すみません」

「ふっ、なるほど。まぁ時間ギリギリだけど、約束の時間には間に合っているし、謝らなくてもいいよ」

　ぼく……いや、ぼくだけでなく、他の子にも、こんな風にわらいかけてくれる大人を、ぼくは知らない。おこるとこわいけど、ぼくはこの人が、ここにいる大人の中じゃあ一番すきだった。

　やることは分かっているので、ぼくはいすにすわる。つくえをはさんで、先生の顔をじっと見つめた。昼下がり、太陽がまどからぼくの目に入る。さっきまでわらいかけてくれた先生の顔は、今はどんな風になっているのかは分からない。

「さて……じゃあ、始めようか」

　そう言って、先生はつくえの引き出しから、とうめいなプラスチックのケースを取り出した。手のひらにおさまるくらい小さなケースなのに、ぼくの心ぞうがドキンとはねる。

　先生は立ち上がり、ぼくのとなりにあるいすにすわる。今はプラスチックケースをにぎりしめているけど、その手を少しずつ近づけられるにつれて、ぼくは、今すぐにでも、この部屋からにげたくなっていく。でも、ぼくの足は、まるで大木のように動かない。

「……いくよ」

　先生の手が、ぼくのうでをガッチリとつかむ。生身のうでは、ていこう出来ない。つかまれている感かくもない。まぶたも動かない。ぼくの目は、先生の手ににぎられているプラスチックケースにくぎづけになっていた。

　そして、少しずつ、にぎられた手が開かれ、プラスチックケースの中身に、何が入っているのかが、目に飛びこんでくる。

　赤いえき体だ。正しくは、赤黒く、ねばりけのあるえき体。ケースの半分くらいまで入っている。色のついた水じゃないのは、すぐに分かる。毎日見ているものだ。

　それは、ぼくをたたくわけでも、大きな声で、しかるわけでもない。それ自体は、何かするわけじゃない。ただ、プラスチックケースの中で、ねちょねちょと赤いえき面をゆらすだけだ。でも気が付くと、ぼくの口の中はすっぱくなっていた。心ぞうも、むねをつきやぶって、外に出てきそうなほどいたいけど、ぼくはそれよりも、だんだん冷たくなっていく自分の体がふるえてしまうのを、どうにかおさえようとする方が大変だった。目がチカチカする。そのフラッシュは、ぼくの心ぞうと同じくらいの速さで点めつし、そのせいで、ぼくは何を見ているのかが、よく分からなくなってくる。それでも、これは消えるどころか、さらにはげしさを、ましていた。

「息を吸って。深呼吸しなさい」

　そんな音が聞こえたけど、まるで、ぼくの知らない言葉のようだった。何をすればいいか、分からない。聞こうとするけど、口を開いたら、中のものがどうなるのか、ぼくはこわかった。

　先生は、かたほうの手だけで、きようにケースを開ける。不意に、生き物とはちがう、むきしつなにおいがする。それが、てつのようなにおいだと気づくのに、ぼくは、かなりの時間がかかった。においの元が、ゆっくりと、ぼくのはなへと近づけられる。写っているけしきが左右にブレる。どうやら、何とか首だけは動くみたいだけど、はんしゃてきに、ただ横にふっていただけだった。

「……あっ！」

　そして、自分のはなが、ケースにぶつかった。ケースは先生の手からこぼれ落ちる。おどろいたような先生の声をＢＧＭに、ぼくはそれを、スローモーションで見ていた。ケースはゆっくりとさかさまになっていき、中のえき体が外に出る。赤黒いそれは、ヘビのような形をえがき、キバを立てて、ぼくの右足の太ももにつきささる。

　そのしゅんかん、ぼくの体は、まるでバネのようにはじけた。それでも、自分の力では体は動かせなくて、つかまれているうでをムチャクチャにふり回したら、ふりほどけたけど、いすから転げ落ちてしまった。それでも、目だけは太ももからはなせず、えき体がせい服の中まで入ってきそうになったところで、気がつくと、ぼくは手でそれをぬぐい、そしてゆかにこすりつけていた。手のひらが熱いのに、こおったように、かんかくがなかった。それでも、おなかの中のものがもどりそうになるかんかくと、ベットリとしたかんしょくだけは残って、それを消すように、ぼくはさらに強く手をゆかにこすりつける。

　ここに先生がいなかったら、ぼくはこれを、いつまでも続けていただろう。気がつくと、先生はぼくをだきしめて、頭をゆっくりなでていた。それでも、しばらくは手をこするのを止められなかったけど、赤黒いあれが見えなくなっていた事に気がつくと、それも止められる。心ぞうはまだむねを強くたたいているけど、手足のかんかくは、自分で動かせるくらいには、もどってきていた。いきをしていない事に気がついて、ぼくは小さく口を開けて、長くいきをすう。そして、ちょっとだけ、いきをはいた。

「大丈夫。落ち着いて。そう、そんな感じ。息はもっと吐いて」

　先生の声も、ゆっくりと耳にとどき、ぼくも何を言われているのか分かる。きっと、ぼくをだきしめている間、ずっとそう言っていたのだろう。ぼくは先生の「吸って、吐いて」の声といっしょに、こきゅうをする。

　何度かこきゅうをする内に、心ぞうも落ちついていくのが、自分でも分かった。いつも通りのペースで心ぞうが動くようになったのが分かると、先生は、ぼくからはなれる。そしてぼくも、さっきまでの自分がどんな風になっていたのか、思い出せる。でも、思い出したくなかった。ぼくは近くにあるいすにすわることもなく、それでも、いそいでそこからはなれて、その場にへたりこむ。おでこには、あせがネバついていたけど、ぬぐう気力はなかった。

「はい、お水。ゆっくりとでいいから、飲みなさい」

　先生が出してきた五百ミリリットルのペットボトルを、こすりつけていない方の手でノロノロと受け取って、ぼくはかた手でキャップを外す。言われた通り、ペットボトルをかたむけて、ゆっくりと中のえき体を口に入れる。まだ口にのこっている、すっぱいかんかくといっしょに、それをのみこんだ。つめたくない、人はだと同じくらいの温かさの水は、気持ち悪くて、何度もはきそうになる。なんとかそれをこらえて、ぼくは先生にペットボトルを返した。先生は、パソコンにしきりに何かを打ちこんでいる。多分、ぼくの病気について、何か書いているのだろう。

　ぼくの病気は、どうやら『ＰＴＳＤ』というらしい。正しくはなんと言うのかは、聞いたけど、よく分からない。分かるのは、やたらむずかしい漢字が多かったことと、血を見ると、さっきのようになってしまうことくらいだ。どうやら、昔に何かあって、そのせいでこの病気にかかったようだ。けど、ぼくは、それについて何もこころあたりがない。というか、昔のことなんて、おぼえていない。ここに来る前のことは、あの女の人に会ったことしか、おぼえていないのだから。親がいないことすら、ここに来て初めて知った。

「……うん」

　パソコンに打ちこみ終わったのか、先生はうでを組みながら、何やらむずかしそうな顔でうなる。

「相変わらずパニックは起こすけど、まぁ経過は上々……かな。少なくとも、吐かなくなっただけ、昔よりはいい」

「そう……ですか」

　口から出た言葉は、そんなことだった。これでいいわけがない。たしかに昔は――思い出すだけでも気持ち悪くなる――あの赤黒いやつを見るだけで、この茶色いゆかを黄土色によごしていたけど、最近はそんなことはなくなっていた。でもそれは近くに先生がいるからで、だれもいなければ、きっと、あっという間に昔のように、はいてしまうだろう。でも、それを口に出すのも、なんかいやだった。

「気をつけてさえいれば、一応、外の世界で生活することもできるけど……」

　先生は、ちょっと考えこんでから、ゆっくりと口をあけて、そう言った。そしてまた、ちょっと考えこむ。

「『６８番』君、ここを出るのはいつだっけ？　確か、テストはもう受けられるよね？」

「えっ……と、来週のテストで良い点がとれれば、次の月の終わりです。九月三十日」

　ここには年に三回、大きなテストがある。もちろん国語や算数のテストはいっぱいあるけど、そういうテストじゃない。ここで六年いる人なら、だれでも受けられるテストで、それで良い点が取れれば、ここを出て、外の世界にいける。ぼくは、この間の水曜日でちょうど六年になったので、そのテストを受けるつもりだ。ちなみに『２５番』も、そのテストを受ける。ずいぶん前から、かなり勉強をしているから、ぼくも『２５番』も、きっとごうかく出来ると思う。聞いた話だけど、そんなにむずかしいテストじゃないみたいだし。それでも、ぼくはかなりきんちょうしているけど。

「そっか。なら、今日から一年くらいは、毎日薬を飲む必要があるかな。ちょっと大変だと思うけど、それでもいい？」

　ぼくは首をたてにふる。きっと本当は、先生は「ここを出るのは、もう少し待って」と言いたいのだろう。もう何年もの間、毎日この人と会っているので、それくらいのことは、表情とか声色とかで、なんとなく分かる。でも、そういうわけにはいかない。ぼくは、早くここを出て、外の世界で、あの女の人の役に立ちたい。ここに入れてくれたこと、入れてくれたから『２５番』に会えたこと、それについて、ぼくは早く、あの人にお礼が言いたかった。

　先生も「分かった」と言うようにうなずき、いむ室の先生に手紙を書いて、ぼくにわたす。それを受け取ったぼくは、ヨロヨロと部屋をでた。